氏　　名	三宅　由希子
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	第 94 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目	「不安をみすえる絵画」 負から正への内的感情の転換に注目した絵画の可能性
審査委員	主査　教授　サイモン　フィッツジェラルド 教授　加須屋　明子 教授　赤松　玉女 教授　渡辺　信明 中井　康之（国立国際美術館学芸課長）

論文の要旨

「どうしても不安な作品になってしまう。」この論文は論者の作品に現れる不安がどのようなものかと言う問いから始まっている。人間には喜びや悲しみなどの感情や気分が存在するが、中でも不安はふさいだ気分であり、日常的に起こる人間の重要な情緒である。これまでも不安は哲学や心理学の側面から論じられてきたが、いまだ複雑で厄介な人間の根本精神であることには違いない。こうした不安が論者の作品のテーマであるが、制作の過程において劇的な感情の起伏が起こり混乱することがある。それは負から正への転換ともいうべき、内的感情を揺さぶられる体験であった。本論ではこの特別な体験に注目し、作品考察及び哲学的側面からこの内的感覚の変化について探求し、論者の抱える不安の本質をあぶり出す。そして不安を描く理由を明らかにし、論者の作品にみる不安を伴う絵画の可能性を提示するものである。

第一章では、一般的な不安について説明し、共通認識を確認した。それを踏まえて不安から生まれた論者の作品を紹介し、不安の原動力となるものを考察した。一般的に不安は日常的なものから究極は死という人間の力の及ばないものまで存在している。こうした不安は恐怖のように特定の対象が存在するというのではなく、そのものに確実性が無く予見不可能なものに対して起こるものであった。

そこで、論者の不安がどのようなものなのか、初期の作品から不安の要因を探っていった。当初、論者の不安は肉親の死が契機となって生まれ、悲痛な感情が直接作品に表れた。しかし次第に少女のモチーフが登場し、死の不安と少女の諭しの往還という物語性が誕生する。ここに生に対する意欲が表象された。しかしその後の教員経験から不安の要素はますます拡大し多様化していく。このように論者の不安は、個人的な経験及び社会との関係性の中で生まれ作品に投影された。また不安感情を避けることなくあえて向き合う論者の姿もみとめられたのである。

第二章では、不安について哲学や心理学の側面から考察した。中でも論者にとって親和性の高いキルケゴールの不安を紹介しつつ、描く中で生じた内的感覚とカントの崇高性の類似点に注目し絵画の可能性を探っていった。キルケゴールは不安について可能性を前に自由によって引き起こされるものであり、過度な期待の上に起こる理性の及ぶことができない領域であるとした。しかし一方で不安は自由への可能性を開くものであり、不安が深いほど人間は偉大であると説く。論者はこうしたキルケゴールのいう不安に共感し作品を描いているが、制作時において不快から快への劇的な転換というべき内的感覚を揺さぶられる経験をする。この感覚が崇高性という概念、中でもカントの崇高性と類似しているのではないかと推測し検証していった。崇高とは 18 世紀にバーク及びカントらにおいて美的カテゴリーとして成立したものである。バークの崇高は、自然を目の前にした時に起こる感動と恐怖の入り混じった視覚による刺激からもたらされる苦痛であり、心理的、生理的な段階に留まっている。

一方、カントの崇高は、圧倒的に大きいものや威力をもつものを眼前にして構想力が破壊され、我々を不安に陥れ圧迫させる。しかし次第に理性が復権し畏敬の念が起こり、私達の内部で不快から快へのダイナミックな転換が起こるというものである。通常こうした恐怖に対して逃げるのが本能的な反応であろう。しかし人間は自由を行使して恐怖の対象を立ち止まって見ることができる。崇高はこの自然の反応を乗り越え、理性を使って自由にネガティブなものに向き合う行為なのである。論者が経験した肉親の死や数々の悲劇は生の感覚をすくませるようなものだった。こうした負の感情を抱え制作し続けるなかで、一転して快の感覚を得るという体験は、この不快から快へと転換するカントの崇高の概念に類似したものではないかと考えたのである。

第三章では絵画のフィールドにおいて不安を想起させる四人の作家達の作品を考察した。エドバルト・ムンクは幼い頃に家族を亡くし、自身も常に死の恐怖を抱いていたことから、死や孤独などの解決不可能な問題を絵画の主題とした。フリーダ・カーロはバス事故に遭い重傷を負った体験を源泉として、痛みや不安の感情を作品に表した。マルレーネ・デュマスは写真や映像を素材として不特定多数の人物像を描き、人間の欲望や死、性という現実の問題を可視化する。石田徹也は自己と社会を取り巻く事象に敏感に反応し、皮肉を織り交ぜながらその違和感と私的な感情を作品に昇華させた。彼らの作品からはいずれも不安を想起させるものばかりであるが、不安の要因は多様であった。しかし、彼らの作品はそれぞれが抱える不安を独自の表現方法によって描かれている。こうした彼らの作例と論者の作品の相違点を考察した結果、自作の 5 つの特徴が見えてきたのである。第四章では、自作の特徴を 5 つのカテゴリーに分類し考察した。1.「死と生の共存」では、鳥や戦闘機、蝶などの負と正を示すシンボルが作品に散りばめられ、死と生が表されている。2.「身体性」では骨や臓器などの普段見えないものが現れる違和感や体に不快な処置がなされる様子から身体の不安が描かれる。3.「女性性」では子宮などの女性特有の身体表現やザクロのような性的シンボルなどからエロティシズムは隠されて主張されている。ここには女性の肉体に対する不安と女性の社会的立場、そして性という複数の不安がみられる。4.「抑圧と解放」では果物と化した女性や自由に飛び回る蝶のように抑圧と解放を意味するモチーフが描かれ、自由を前に不安を抱きあえて自らを抑圧する姿が表れる。5.「象徴・シンボル」では作品に描かれるシンボルを分類、整理した。シンボルの多くは草花や動物などの身近なものが素材となり、その源泉は神話や聖書などの多義的なものから独自のものまで多様であった。こうしたシンボルは直接的な表現を避ける為だけではなく、複数の

組み合わせから新たな意味が生まれ、全体が紡ぎだされる。またシンボルは意図的に描かれたものではないが、最終的に画面に残され他者もシンボルと認識できることから、作品は普遍性を備えた共感の場となったのである。このように論者の作品は身近なモチーフがやわらかい色彩で描かれており、一見和やかな印象を受けるかもしれない。しかしよく見ると否定的な要素がちりばめられた不快と快の混在した絵画であった。

そして最終章において、これまでの作品考察及び哲学的側面から制作時に体感する独特の経験が、カントの崇高性と類似性を有するという認識に至ったこと、そしてその体験にこそ不安を描くという意味が見出されたのである。カントは崇高を抱く時、物質的にも精神的にも現象から特有の距離が必要であると言及しているが、論者も制作において負の感情に一定の心理的距離が生まれる。こうした制作過程により内的感覚は整理され不安の本質があぶり出されることで負から正への転換が行われた。

ゆえに論者の作品は負と正の相対する感覚が混在する絵画となるのである。そしてなにより痛みの後に快の感覚を得られるからこそ、制作し続けることができるといえるだろう。痛みを持つものがさらに痛みを自覚することで、一転して生の喜びを得るように、論者の内部でも不快から快への転換が行われている。またキルケゴールが不安は自由の可能性であると述べたように、論者も予見不可能な自由を前に一瞬不安を覚え尻込みするが、再び不安と向き合う。このように論者にとって不安と向きあうことは格別の学びであり、新たな生への意欲、可能性を内包するものであった。つまり不安から目をそらさないで苦しみを直視することが、不安や苦痛に対処する一つの道であり、不安をみすえる行為そのものが論者の絵画の本質的な原動力となるのである。

審 査 結 果 の 要 旨

博士課程本審査に提出された三宅由希子の作品と論文による研究成果は、父親の死、普通高校と夜間高校で教員を勤めるなどの三宅自身の体験からの偽りのない「不安」という感情を起点として、独自の表現へと昇華することに成功しているといえる。

不安と一口に言っても複雑であり、洋の東西を問わず古くからさまざまな分野において論じられてきているが、キルケゴールやカントを援用しながら哲学的、かつ美学的見地から不安という観念に迫った。こうした手堅い考察が二次審査発表より精確になった点を「作品文献資料との比較考察も丁寧に見直され、二回目の発表の時に比べてよくまとめられた印象であった」と審査した教員が指摘し評価している。

絵画の側面において三宅は「死と生の共存」、「身体性」、「抑圧と解放」といった四つのテーマから主に美術史上に残る先行作品との比較を行い、自作の根底にある不安を浮き彫りにしている。しかしながら、三宅の作品上にあっては、先の四つのテーマが明確に切り分けられるわけではなく、テーマが複層しながらメタファーに富んだ物語が画面上に展開する。

なかでも博士課程の集大成ともいえる大作《snow doll》(182×233.4cm) は、これまで主人公となる女性は森や木々に囲まれた野外が舞台であったのに対して室内となり、より多くのモチーフが散りばめられるようになった。廃墟となった洋館の一室を思わせる中央には、天井から吊り下がった透明で巨大な半球 (スノードーム) に入った上半身裸の女性が見える。その女性には AED だろうか、救急救命用装置が取り付けられており死と生を暗示していると共に、この女性は抑圧されているのだろうか救済されているのだろうか、といった矛盾する読み解きを可能にする。また、スノードームそれ自体や甲冑、鳥籠、ハイヒールなどは抑圧を、一方、室内といっても木々や小鳥、蝶などの自然が入り込んできている状態は解放を象徴していると認められるのも先述の通りであり、重層的な読み解きを可能にし作品に深みを与えている。なお、この作品は昨年「京展」において市長賞を受賞していることを申し添える。

二次審査ではモチーフや色彩の選び方について三宅自身の独自性を求められたが、本審査においては、そうした課題に例えば先の《snow doll》ではよく応えていると審査した教員は評価している。学外審査員もまた、シンボル辞典などを紐解いた解読に、硬直した表現となる危険性を指摘する向きもあったが、逆に、過去の芸術家たちの象徴表現を十分に活かしながら、自らが見いだした「不安」というテーマを表現しようとする強い意志をそこに見る、といった所見を述べている。

三宅が自作と比較考察したムンク、フリーダ・カーロなどは執拗なまでに死の不安と葛藤する自己が投影されているのに対し、三宅の場合一見すると装飾的な画面であるが、アクリル絵具特有の平滑な質感や、面相筆を使った細かな描写によって不可思議な物語性をおびた巧みな作品に仕上げている。また画面の明るい色彩と相まって「不快と快の混在する」「真意を隠しつつ控えめに複数の不安をほのめかす」と自身が述べている通り、個人的な体験から出発しながらも、三宅由希子の絵画言語がここに獲得されたといえるだろう。こうした点を高く評価し、審査員全員一致で博士本審査合格とする。